

日頃からお世話になっている皆様へ

後援会長からの挨拶

皆様方におかれましては、日頃から本会活動にご理解とご協力を賜り、心から厚くお礼申し上げます。

さて、宮坂氏の引き続きの政治活動支援についてのご相談をさせていただくため2月29日開催予定でありました幹事会議（拡大役員会）を新型コロナウイルス感染拡大の予防から中止とさせていただき、執行役員に全権委任をいただいたところから宮坂氏に4選出馬を要請し、快諾をいただきました。

7月7日をもって3期12年間の任期を迎えます宮坂氏はこれまで、健全な行財政運営、きめ細かな社会福祉、移住・定住の促進、子育て支援・教育環境の充実、産業・経営基盤の拡充、安心安全な地域社会の形成、環境保全と交流促進、さらには胆振東部地震からの復旧復興事業等、町民の皆様が安心して暮らせるために全力で邁進してまいりました。

宮坂氏にはこれからも町民皆様の信頼と期待に応え、その役割をしっかりと担っていただくため、総会を開催し激励やご意見を頂戴すべきところではありますが、3密を避けるよう要請されています状況下では、総会開催など通常の政治活動を制約されていることをご理解いただきたいと存じます。

後援会会員の皆様には、再度、一丸となって宮坂町政の4選実現に向けて総力を結集していただくことをお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

後援会会長 寺坂文秀

宮坂尚市朗からの所信報告



日頃からお世話になっている皆様に、なかなか近況報告ができないことを、先ずはお詫び申し上げます。平成30年9月6日に発生した北海道胆振東部地震から1年6か月となる今春3月6日に、来るべき厚真町長選挙の候補予定者として再度挑戦したい旨、記者会見してから、後援会総会におけるご承認や集会などでの報告ができないまま、月日が経過してしまったことについても重ねてお詫び申し上げます。

本年2月28日の鈴木直道北海道知事が発出した緊急事態宣言以来、「不要不急の外出は控えてください。手洗いに、マスク着用。密閉・密集・密接の3密は避けましょう。免疫力を低下させないために、十分な栄養と休養を取りましょう。」と、毎日、様々なメディアや行政機関から注意喚起が為されていますが、それでも、新型コロナウイルスの感染拡大が収まりません。世界中で猛威を振るうこのウィルスに対抗するため、今私たちがしなければならないこと、それは「医療崩壊を防ぎ、大切な命を守るため、誰もができる唯一の手段である自粛と我慢です。」世界中の英知が結集し、特効薬やワクチンが必ず開発されることを信じて、或いは、広く耐性が備わるまで辛抱強く時を稼ぐ必要があります。経済活動が停滞し、生活難や先行きが見えない不安に苛まれている方々が大勢いることは心配ですが、疑心暗鬼になり、誹謗中傷が起き、意見の対立や抗議行動が、これ以上、世界各地に広がらないことを心から祈っています。

新型コロナウイルス災禍（以下において「コロナ禍」と表記させていただきます。）に関して長くなって恐縮ですが、ご承知の通りウィルスは、目には見えませんが足はありません。人間や動物が自ら媒体となって、拡散させていることを自覚しながら、核心的対策と社会崩壊を防ぐ対処策を粘り強く、バランスよく講じていかなければなりません。先人や私たちがこれまで積み上げてきた現代文明の真価が問われています。

さて、本題に入りますが、私、宮坂尚市朗は、皆様のご理解とご支援の下、今年の7月7日に厚真町長3期目の任期満了を迎えます。正に光陰矢の如し、これまでの12年間は瞬く間に過ぎ、皆様を始め町民各位のご期待に十分お応えできたか自問自答を繰り返してま



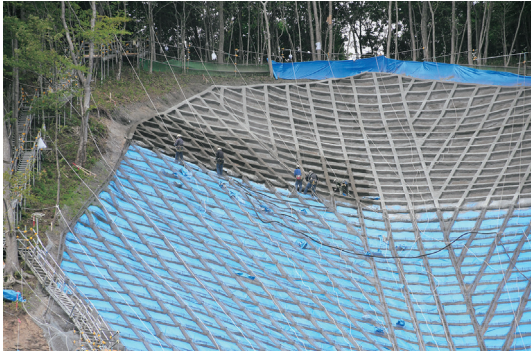
いりました。平成20年からの1期目は「選択」「ピンチをチャンスに」「住民主体の地域経営」をキーワードに厚真町の地域再生を目指しました。2期目は「選択と集中」「危機と挑戦」「住民主体の地域経営」の視点で、5,000人の夢を叶え豊かな厚真町を次世代に引き継ぐこと、3期目は「田園回帰1%戦略の実践」「あつまを知り、強みを生かす」「住民主体の地域再生」の視点で、みんなが輝き、支持され選択されるまち、住み続けたいまちを目指して参りました。この間、田園回帰のムーブメントが注目され、厚真町でも第4次総合計画及び地方創生総合戦略の策定、第7次農業振興計画など種々の分野別個別計画を策定し、実践してまいりました。

紆余曲折はありましたが、平成27年には、町民の悲願でありました多目的厚幌ダムの定礎式が高橋はるみ知事を堤体建設地点の幌内にお迎えして厳かに執り行われ、平成30年5月にはダムの湛水試験が無事終了しました。時を同じくして、同月には国営かんがい排水事業勇払東部地区の基幹工種である導水管による軽舞地区への試験通水が行われ、また、6月には、富里地区で統合簡易水道浄水場の落成式が挙行され、8月には全町域に給水が開始されました。

大きく報道されていませんが、特筆すべきものとして、この年の7月・8月には、長らく続いていた人口減少に歯止めがかかり、上向きに転じ始めたのです。その吉報を、私に真っ先に報告に来た亡き中川信行地方創生担当理事の笑顔は、今でも忘れられません。平成30年まで5年間も続いた人口動態における社会増は総務省から高く評価され、優良事例の一つとして全国に紹介され、総務大臣表彰も受賞しました。農業分野では、平成10年朝日地区から始まった道営圃場整備が、関係者のご努力と受益者のご理解のもと順調に進められ、平成30年には富里地区において本格的に施工されていました。また、農業関係者が8年続いた平年作以上の記録を更新したいと意気込んでいた平成30年でもありました。

この平成30年は、6月から低温に雨が続き9月4日には台風21号の影響もあり、6日には被害状況調査が行われようとしていた矢先の午前3時7分に北海道胆振東部地震が発生し、厚真町を含む胆振東部3町に未曾有の大災害をもたらしたのです。内陸直下型の震源





は厚真町とむかわ町に跨り、深さ37km、マグニチュード6.7、最大震度は厚真町鹿沼地区で7を記録しました。約9,000年前の樽前山噴火物が堆積する厚真町の山々では大規模な山腹崩壊が伴い、人里に近い場所では、多くの家屋を飲み込み、手塩にかけて整備してきた田畑やかんがい施設を覆いつくし、道路や河川を破壊し、埋め尽くしてしまいました。山腹崩壊面積は速報値で3,230ha、岩盤滑りは100か所以上にも達する大規模なものでありましたが、何より、これまで厚真町の発展を牽引してきた多数の有為な人材を一瞬で奪い去ってしまいました。中には16歳という夢と希望に満ちた若い命も含まれていました。震災による直接死が36人、その後、避難所生活で命を落とされた1人を合わせて、犠牲者は37人を数えました。厚真町の人口に占める犠牲者の割合は0.8%で、100万人都市に換算すると8,000人が亡くなったことになります。

崩落した土砂量は3,000万立方とも推計され、災害復旧工事により早急に排除しなければならない土砂量はその内の300万立方と見積もられました。農地は155haが土砂に埋まり、かんがい施設は被災者の目には復旧が不可能ではないかとさえ映りました。そして、ともに農業を志してきた先輩や同僚の犠牲が、助けられた被災者の心に、決して癒えない深い傷として残されました。

建物被害は住家屋だけでも全壊、大規模半壊、半壊家屋は、当初560棟を数え、一部損壊家屋1,085棟を合わせて約1,650棟にも上りました。被災家屋は全家屋の90%にも達しています。

揺れの大きさから、辛く恐ろしい記憶を忘れられない方、大切な思い出と家財を失った方など、全町民が被災者となった北海道胆振東部地震から既に1年8か月が過ぎました。この間、私たちは、体をこわばらせて、じっとしていた訳ではありません。被災翌年には、応急復旧が整った田畑に種をまき、苗を植え、収穫の秋に向けて、いつも通りに肥培管理に丹精を込めました。被災した家屋を解体し、失った農機具・資機材を揃えなおし、家屋や機材庫などの再建のために奔走してきました。止むを得ず住み慣れた土地を後にして、生業や日常生活の再建を目指す方、また、今もなお宅地耐震化の復旧工事に不安な日々を送られている方など、それぞれに温度差はありますが、それでも懸命に

立ち上がり、一刻も早く日常を取り戻すべく、日々や体調と向き合ってきました。改めて、皆様のご努力に敬意と感謝を申し上げます。

平成30年9月6日未明の発災直後から、人命救助や捜索活動に昼夜を分かたず懸命に活動していただいた20,000人にも上る消防機関、警察関係者、自衛隊の皆様、10,000人にも上る応急工事、災害復旧工事、罹災証明などの必要な調査にご協力をいただいた国、北海道、全道各市町村の皆様、3か月にわたる避難所運営にご協力いただいた北海道、東北各県、苫小牧市、白老町の皆様、既に5,000人を超え全国各地から今もなお駆けつけていただいている災害ボランティアの皆様にも、改めて心から感謝申し上げます。

そして、私たちの窮状を案じていただき、11月15日の雪が舞う厳しい季節にもかかわらず、お見舞いに行幸啓いただいた上皇、上皇后両陛下からは、深いお心遣いを賜りました。当日、出迎えられた皆さんの臉に希望が浮かんだ瞬間だと、私は感じました。

全ての避難所が閉鎖された後の同年12月15日には、高橋はるみ北海道知事をお迎えして、総合福祉センターで慰霊式を挙行し、翌令和元年9月7日には、同じ会場で鈴木直道新北海道知事をお迎えして、1周年追悼式を執り行いました。時は違えどもご来賓各位の追悼の辞や遺族代表の挨拶には、災害に立ちすくむことなく、先人や犠牲になられた方々の愛した厚真町を必ず復旧・復興させるとの思いがこもっており、上皇、上皇后両陛下のお心遣いや災害尽力者、そして全国各地から寄せていただいた、心からのご支援、ご声援に応えていかなければならないと、主催者として、また、町民の代表として決意を新たにしたところでもあります。

改めて、震災の被害状況を顧みますが、厚真町が事業主体となる当面の災害復旧査定額は約230億円、北海道は約350億円、国は凡そ420億円、これに、予算規模が確定していない国の直轄砂防事業、着手したばかりの宅地耐震化事業、まだ手付かずの森林災害復旧事業と続き、正に、災害復旧だけでも私たちが乗り越えなければならぬ道のりは遠く険しいと言わざるを得ませんが、それでも一步一步、着実に歩みを進めていかなければなりません。災害復旧現場の最前線で危険と隣り合わせの難工事を施工していただいている建設





事業者のご努力のおかげもあり、ご紹介した厚真町分と北海道分の公共土木事業関係は、ダム関係を除いて今年度いっぱいでは大半の工事が完了する見込みです。皆さんが心配している災害公営住宅と公営住宅建設費約27億円は、速やかに町議会で議決していただき既に着手、約28億円と見積もられている厚真福祉会が事業主体の高齢者福祉施設の建設支援にもご同意いただきました。災害公営住宅等は10月末を目途に、高齢者福祉施設は来春のオープン目指して、コロナ禍の中、建設事業者には無理を承知で頑張ってください。

被災者の皆さんの個人資産の再建には、全国から寄せられた義援金や被災者生活再建支援金、厚真町単独の補助制度拡充などにより約30億円を交付、或いは予算化させていただいています。損害額全てを補償できるものではありませんが、個々様々なケースに応じての再建と心のサポートに関して細やかに対応させていただきたいと思います。

本年度も厚真町にとって、北海道胆振東部地震災害からの復旧・復興は1丁目1番地であることに変わりありません。被災者自ら、或いは地域として地域再生に向けて歩み始めている中でのコロナ禍です。世界中の人々が苦しんでいる中、人々が理性的に行動し、あらゆる困難を歴史に学びながら再び克服していかなければなりません。厚真村に戸長役場が設置されてから123周年、町制施行から60周年、北海道胆振東部地震発災から1年8月が経過します。私たちは復旧の最中にありますが、厚真町の潜在力を耕しながら、人を育て、新しい挑戦を続けていかなければなりません。豊かな自然環境を取り戻し、守るべきものを守るためにも、あらゆる分野でのイノベーションを地方が実装しながら、災害列島日本が迎えている人口減少時代において、今改めて地方の価値を再構築してまいりたいと考えています。冒頭申し上げましたが、本来であれば、後援会総会を開催し、皆様方にご理解ご協力をお願い申し上げるべきところですが、新型コロナウイルス感染症拡大防止要請を受けて、先ずは書面でのご挨拶とさせていただきます。これまで同様に、ご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。

令和2年5月吉日

宮坂尚市朗 拝